# 北澤先生の思い出（9）

神谷章夫

今回は、逗子の俳人山田真砂年さんの俳句を紹介したい。山田さんは、昭和二十四年生まれ。故鍵和田秞子主宰の「未来図」に昭和六十一年入会、平成七年句集「西へ出づれば」で俳人協会新人賞受賞、令和三年一月「稲俳句会」を立ち上げ主宰に就任。句集は他に「海鞘食うて」を上梓。令和二年より、一遍上人忌俳句大会の選者をお引き受けいただいている。

◆「西へ出づれば」より

恋猫を前に恋猫しどろもどろ
有給休暇土喰う燕見てゐたり
緋のカンナ終生路上で生活す
黙祷の手にくしやくしやの夏帽子
中国・ウイグル自治区二句
西安を西へ出づれば残暑かな
片陰や驢馬と待つ児のうつらうつら
林檎割るアダムの分とイヴの分
実朝も公暁も寒の牡丹かな
三寒四温嘘がばれずにゐてつらし
巡礼と並ぶ日蔭や嗅ぎ煙草
どぢやう汁悪事企むこと楽し
ほうたるのあのあたりから地雷原
抑へても肩が笑へり黄水仙
海恋へば海は声あぐ西行忌
炎天の列の最後に爺と婆
しづしづと軍艦ゆけり懸大根
信濃路や手のひらほどの深雪村

◆合同句集　塔　第十集

ふるさとは真綿の重み月おぼろ
臍の緒を思い出したりかひやぐら
啓蟄や風土記の神のなまめけり
たましひのゆるびてをりぬ花月夜
海境に月のきらめき蚊遣香
負の遺産ありて竹伐る国なりき
道いまだ潮の匂へる揚羽蝶
耳朶のかたさに月見団子かな
こりこりと二個の胡桃を掌
霜倒す小鳥の重さ朝の粥
蓮根掘膝をたよりに動きをり
老人を闇に忘れて年用意
火の奥に燃え残るもの山眠る
妻留守の炬燵に埃見てをりぬ
静けさのたちのぼりたる初日かな
松取れてけふの一歩を広く出る

◆稲　令和三年五月号

山の影枯野にのびて吾を呑む

◆稲　令和三年七月号

川端のさくら舞ひ込むオムライス
花喰うて風に流れて鳥の恋
生ぬるき夜なり蛤すすりをり

◆稲　令和三年九月号

蓮開く濁世と言うたではないか
幾たびも雲過ぎりけり柳蘭

「西へ出づれば」時点から変わらぬ独特の感性に引きずり込まれる。